

『幼稚園の現場から』

12・「ことばを豊かに ― カルタの活用」

原町幼稚園（静岡県沼津市） 園長 鶴谷主一

年中組ことばの カリキュラム ばばばあちゃん カルタことば

今回は、かれこれ15年ほど原町幼稚園で独自に行ってきた年中組のことばのカリキュラムについて紹介します。簡単に言ってしまえば、「カルタのことばを覚えてカルタとり大会をする」というだけの話ですが、そこは幼稚園、いくつかの思惑と仕掛けがあります。

■カリキュラムが生まれた背景

子どもたちと接していて気になるのが、「はいこれ」「やって」という単語と動作だけで会話をすませ、「誰が、なにを、どうしたいのか」という文で話ができない子どもが意外と多いと感じたことです。子どもに限らず大人でも、「メシ」「フロ」「カネ」・・・など最低限の単語で夫婦の会話を済ませる人種もいるようですが、幼児期からこれでは、えらく早過ぎます。

幼稚園では誕生会を毎月催し、誕生児がみんなの前で名前を言ってインタビューに答えるプログラムがあります。そのときに、「〇〇ちゃん果物で何が好きですか？」と司会者が質問しますと、

「いちご」と単語のみ答える子どももかなりの確立で見受けられ、司会者が「いちごです、ってデスも付けて言おうね」と言い直させる場面があるのです。

このようなことばの未熟さは、生活の場面場面の指導で十分に発達していくのですが、「もっとことばの世界を豊かに楽しみつ、文字の読みにも興味の持てるカリキュラム」が無いかなあ、と探しておりました。



そんなときちょうどいいモノが見つかりました。福音館書店で販売している「ばばばあちゃんのくいしんぼうかるた」です。僕の娘がちょうど5歳頃、このカルタで遊んでいるうちに読み札の言葉を全部覚えてしまって、カルタで遊ぶだけでなく百人一首の上の句と下の句を読むように、お風呂に入りながら、記憶力くらべのようなクイズを出し合って楽しんだ経験から、「これはイける！」と閃いたのでした。

■文字の「読み」に取り組む

原町幼稚園では年長組で3学期に卒園文集を制作します。そのときに、自分のページに楽しかった

時の絵と文章を自分で書くことを目標にしています。その前の段階として年中組では文字を読むことに興味を持ってほしいと考えています。

ところが、市販の文字のテキストはなかなか良いものが見つかりませんでした。五十音表に「あ＝あひる」「い＝いぬ」と言うように（頭文字＋単語＋イラスト）で覚えていくものがほとんどだからです。そんな教材を使って急ぎ足で文字を指導するとき、下手をすると「覚えること」が目的になって、「覚えてたら完結」してしまいがちになります。完結してしまったら子どもは興味を失いそれ以上学習する意欲を無くしてしまいます。

言葉や文字は実際に生活のあらゆる場面で使うためにあるのですから**字を記号として覚えるのではなく、言葉の意味やニュアンス、リズムなどもいっしょに獲得していく**ほうが子どもにとって良いと考えました。

そして文字を習得すると、 楽しい世界が広がる！

という体験が今後の学習意欲につながってほしいという願いも込められています。

もちろん、カルタだけでなく幼稚園生活の中の日常的な会話や文字環境、絵本や紙芝居に親む等の活動と平行して進めていくのは言うまでもありません。言葉は自然に覚えていくのですが、文字は意識的に関わらなければ獲得できません。まず「覚えたいくなる環境」「読んでみたくなる気持ち」を育ててから、進めていくことが大切だと思います。しかも、大人を喜ばせ褒められることが嬉しくて「覚えたいくなる」のではなく、自分の内なる欲求（内発的動機）として、「覚えたい！」と思ってもらいたいのです。

カリキュラムの第一段階は「ばばばあちゃんを好きになる」と

ころから始めました、ご存じの方も多いと思いますが、「ばばばあちゃん」は福音館書店から発行されているシリーズ絵本の主人公で、絵本作家「さとうわきこ」さんの作品です。

◆詳しくはこちら

<http://www.fukuinkan.co.jp/ninkimono/bababa/author.html>

ばばばあちゃんは子どもたちに大人気で、既に絵本は22冊も発行されているのでカリキュラムの導入はこれでバッチリです。年中組になった1学期は、このシリーズ絵本をドンドン読み聞かせます。子どもたちはこちらの思惑通り、奇想天外なストーリーもさることながら、ガキ大将のようなばばばあちゃんのキャラクター取り憑かれていきます。夏休みをはさんだ2学期、みんなが、ばばばあちゃんのファンになった頃、カルタの絵札を大きくコピーしたカードを見せながら

先生が読み札を読んで きかせます、これが第二段階。

子どもたちはドンドン読み札のことばを覚えていきます。フラッシュカードで都道府県名や天皇の名前等をドンドン覚えていく学習に似ていますが、違うのは「将来役に立つかもしれないけど、とくに今覚えたいものではない」教材ではなく、大好きなばばばあちゃんが出てくるのでついつい覚えたくなっちゃうという子どもたちの心情。これがミソです。しかも大好きな食べ物が満載の「くいしんぼうカルタ」ですから「次はなに?!」と子どもたちもくいついてきます。

さすが絵本作家、さとうわきこさんの作ったカルタだけに、内容も絵本とリンクしていたり、絵本に登場するキャラクターも描かれていて楽しいことはいうまでもありませんが、もう一ついいところがあります。ことばと絵がお互

いに補完しあっているのです。

ことばだけでは意味が通じない読み札も、絵を見れば「ああ、なるほど！」とわかるような札があるのです。

これがとてもイイ！

たとえば



『かくした おかし かびだらけ』なんていう言葉の意味を「どうして隠してあるとカビだらけになるの?」「リスさんはどうして隠したんだろう?」と考えたりする第三段階。ここでは普段

使わないことばの意味を
考えたり、行間にあるニュアンスを読みとって楽しめます。

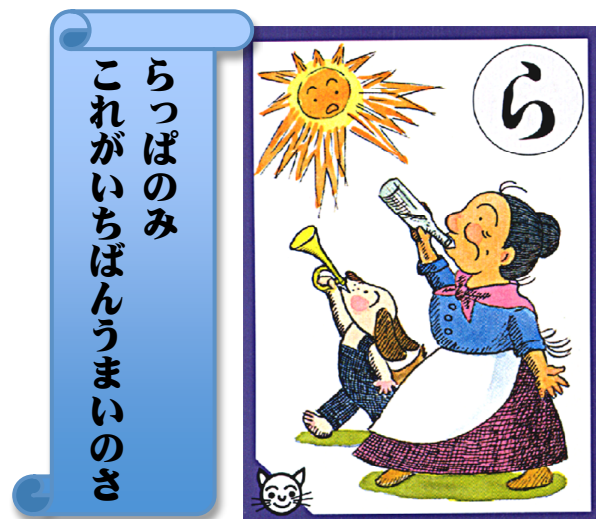
実際に子どもたちから出てきた疑問・珍問をご紹介しますと・・・

『らっぱのみ これがいちばん うまいのさ』

「子/ラッパを飲むの?」「子/ラッパの実?」

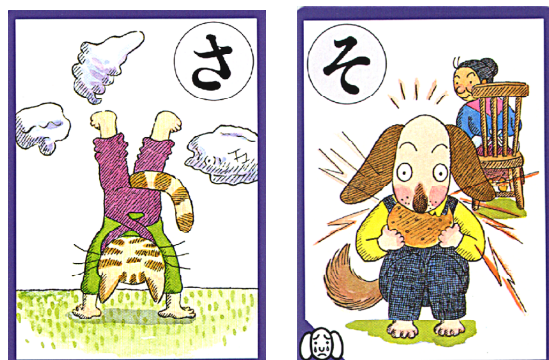
「先生/こういうのをラッパ飲みっていうんだよ」とジェスチャーを実際にやってみる。

そうか、ラッパを吹いてるみたいだね！



『さかだちすると けしきも さかさ』

「子/けしきってなに?」「先生/え〜と・・・風景じゃなおさらわからないし・・・」・・・ボキャブラリーの少ない子どもたちだけに、わかりやすく説明することって意外と難しいんです。



『そっとたべても みつかるせんべい』

「先生/何でそっと食べても見つかるんだろうね?」

「子/バリって音がするからだよ」

『とをあけて まわりをみまわすくいしんぼう』

「先生/どうして周りを見回すんだろうね?」

「子/どれを食べようかさがしてるんじゃない?」

「子/だれか見てないかさがしてるんだよ」



…というぐあいには、先生の問いかけに子どもたちが絵の様子やことばの意味を考え、それを楽しみます。

カルタことばがかなり浸透してきた**第四段階**では、字が読めなくてもカルタ取りなどをして**遊べる**ようになりました。中には読み手を買って出るような子どもも現れ、他種類のカルタ、すごろくなど遊びも広がってくる時期です。

そして第五段階は 3 学期。

このカリキュラムの仕上げとして参観会を設け、保護者を園に招いて、クラスみんなで声をそろえて読み札を暗唱する「**群唱**」を披露します。これも普通にやったのでは面白くありません。予め絵札を数枚保護者に手渡し、順番に子どもたちに見えるように上げてもらうようお願いします。雑壇に整列した子どもたちは、一列目の保護者が上げた絵札を見て、暗記した読み札を声をそろえて群唱します。二列目の保護者は、絵札を見せずに頭文字だけ「あ」とか「き」とか言ってもらいます。子どもたちは、それを聞いてから群唱です。三列目の保護者は、読み札の「下の句」を読みま

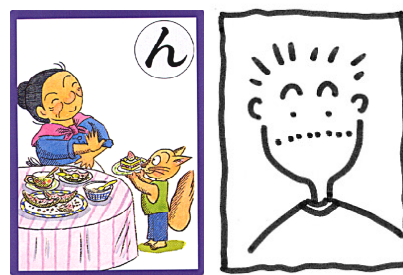
す。そして子どもたちが上の句から群唱。

難なくすばらしいパフォーマンスを見せてくれますので、

保護者の皆さんは「ほー！すごいね！」と喜んでくれます。（それからカルタの注文が相次ぎます）

その後はオマケのお楽しみタイム！数人ずつのテーブルに分かれて「親子カルタとり大会」を行うのですが、さすがに大人は素早く、ホンキを出されると4～5歳の子どもたちは太刀打ちできません。しかし読み札は先生が読んでいるので秘策があります。子どもたちが負けそうになると、「下の句読み」に切り替えますと、子どもたちに勝機がやってくるのです。

冒頭に書いた「話し言葉が順序正しく」話せるようになるための一つの型としてのカルタことばの暗唱。このカルタを作ってくれたさとうわきこさんと、定番商品としてロングセラーしてくれている福音館書店に感謝しつつ、今年も原町幼稚園では、ばばあちゃん好きの子どもたちが増殖中です。



ツルヤシュイチ

(幼稚園勤務29年/うち園長10年目)

<http://www.haramachi-ki.jp>